

「貞観政要」に学ぶ諫言の重要性

「意見が言えない組織は衰亡する」

『貞観政要』という書物をご存知でしょうか？これは唐（六一八〜九〇七）の第2代皇帝、太宗・李世民と、その臣下たちの言行録です。「貞観」は当時の元号で、長い中国の歴史で四回しかなかったとされる国内が平和に治まり繁栄した時代（盛世）の一つとされています。

李世民は過去の王朝が減んだ一因は、皇帝を恐れて臣下たちが言うべきことを言わなかったからだと考えました。自身もそうなる可能性があると考えた李世民は優れた皇帝になるために、自分にとって耳の痛い話（諫言）を積極的に求め、「諫議大夫」という役職を設け自らを律する仕組みとしました。

臣下が意見を言えない理由を李世民が尋ねた際、諫議大夫の一人はこう応えます。「臣下は怒られたくない、地位を失いたくない、という自己保身のために進言せず、同調してその日その日を過ごすのです」と。リーダーが気に入るような話ばかりを部下がすれば、やがてリーダーは裸の王様になり、所属する組織の持続可能性は損なわれます。そのことを知る李世民は、「自分は心を開いてどんな諫めでも受け入れるから、あなた達も遠慮して言えないということはないようにしてほしい。そして闊達な議論をして国を平和に導いていこう。」と述べました。

現代に当てはめて考えてみましょう。「皇帝」を会社、「諫議大夫」を社員、あるいは労働組合と置き換えられそうです（※本来、労働者と雇用主は対等な関係）。

JR九州ではコロナ過に乗じて利用者と労働者を犠牲にした合理化を強力に推進しました。最近では大きな事故が相次いでいますが、安全とサービスを基盤にするどころか犠牲にし、帳簿上の利益改善を優先したのですから当然の結果です。特に広木駅の鉄道人身傷害事故については、労働組合や現場の多くの社員が再三危険性を指摘していたにもかかわらず、ワンマン最大両数以下の停目を撤去しなかった結果、起きるべくして起きた事故といえます。さらに人命が危険にさらされたにも拘らず、その後も停目の見直しすら行いません。その他の事故についても、行き過ぎた合理化が一因となっていることは、事故のほとんどがワンマン列車で発生していることから明らかです。極めつけはこれら事故の原因を乗務員の不注意や意識の低さにあるとしてやり玉に上げることで、責任転嫁も甚だしい。ヒューマンエラーは無くならないというのは人類の共通認識であり、エラーが起きても人命を危険にさらさない仕組みを構築することは会社の責任です。

良い会社になろうと思うのであれば、会社には耳の痛い意見も受け入れる姿勢が必要なのではないでしょうか？

等閑をが
対議論を
が場議こ
使立なる
必要な
労達す必
要です。



第181号

2023年12月1日

発 責 国労九州本部
住 所 博多区博多駅東3丁目9
番3号ニッコウハイツ1003号